

民謡はいかにして伝えられるか—ブルターニュの場合

梁川 英俊
鹿児島大学法文学部

How to Transmit Folk Songs? — A Case Study of Brittany

YANAGAWA Hidetoshi
Faculty of Law, Economics and the Humanities, Kagoshima University

Brittany occupies a large peninsula in the northwest of France, and stands out from the rest of France not only physically but culturally as well. The area has been inhabited by the Celts since about the 5-7th century. They gave the region a Celtic language which remains in the western part. In the middle of the 19th century, Brittany experienced a revitalization of traditional culture with the discovery and widespread collection of folk songs.

In the 1950s, Loeiz Ropars adapted the *fest-noz*, a “night party” in rural communities and set the stage for the folk revival. Since the 1970s, Breton music has been modernized and adapted into folk-rock and other fusion genres through the influence of Alan Stivell. Now it is very popular even outside the region. Large-scale Celtic festivals are held in the summer in towns around the region. Yann-Fañch Kemener and other famous singers are continuing Breton traditions.

Key words : Breton music, Brittany, Celts, fest-noz, folk song, singer

はじめに

奄美シマウタはここ数年、急速に愛好家層を広げている。そのきっかけのひとつが、元ちとせなどメジャーデビューした若手の唄者たちの活躍にあることは言うまでもない。しかしより広い視野で見れば、この現象は90年代から本格化する世界的なワールドミュージック・ブームによって準備されていたとも言える。それは第三世界も含めた広い地域の音楽を人々に紹介し、シマウタが違和感なく受容されるための土壌をつくった。シマウタがそうであるように、世界には少数言語によって唄われる民謡が数多くある。そのなかには国境を越える聴衆を獲得しているものも少なくない。が、そうした民謡はその愛好家層の拡大とは別のところで、現在その伝承にまつわるさまざまな共通の問題を抱えている。それゆえ世界の民謡の現状を知ることは、シマウタの未来を占うことと無関係ではない。ここではフランス・ブルターニュ地方の民謡を取り上げ、その歴史と現状を紹介してみたい。

I ブルターニュの民謡について

ブルターニュの概要

フランス北西部の半島地帯に位置するブルターニュ地方は、それぞれに個性的なフランスの地方のなかでも、際立った独自性をもつ地方として知られる。その独自性の起源には、まずブリテン島からの移住民の存在がある。4世紀末から7世紀中頃にかけて行われたこの移住は、すでにローマ化されていたこの地にラテン文化とは異なる文化をもたらした。とくに言語である。移住民が話していた「島のケルト語」の一派であるブリトン語は、ここでやがてブルトン語へと変わり、いまなおこの地方の西半分をなすバス・ブルターニュ地方に残る。もっとも、現在このことばは話者の減少が著しい。それを日常的に使用する人の数は、1997年の調査ですでに6万人台。その大半は高齢者である。

歴史的に見ても、ブルターニュは9世紀半ばにノミノエ *Nominoé* によってフランク王国の支配を離れてから1532年にフランスに併合されるまで、「ブルターニュ公国」として独立国の地位を保った。のみならず、併合後もこの地方はルイ14世治下の「赤帽子の乱」や大革命後の「ふくろう党」の反乱など、中央支配に抵抗する数々の反乱の舞台となってもきた。こうした事情を背景に、ブルターニュの人々は他の地方の人々と比べて抜きん出て強い地域的アイデンティティーをもつ。彼らはしばしば「私はブルトン人だ」と口にし、白黒二色に染められたブルターニュの地方旗「グエン・アー・デュー」 *Gwenn ha Du* を高く掲げる。むろん、その意識が極端に昂じた場合には、しばしばフランスからの独立を志向する分離独立主義の運動にもなる。こうした運動に加担する人はブルターニュでもごくわずかであるが、その存在は20世紀の初めからこの地方の歴史の一部をなしている。

この背景には、ブルターニュが長くフランスでもっとも開発が遅れた貧しい地域であったという事情もある。それは1950年代に「ブルターニュ問題」としてクローズアップされ、国家的な問題にもなった。開発の遅れから、多くのブルトン人は仕事を求めてパリや他の諸都市に流出した。北米大陸をはじめ海外に渡った人も少なくない。

ブルターニュのフランスへの距離感をよく示すのが、その「ケルト圏」（アイルランド、スコットランド、ウェールズ、マン島、コーンウォール、ブルターニュ）への帰属意識である。ブルターニュのアイデンティティーの根拠は、フランスの一部でありながら、同時にこのケルト圏にも帰属するという独特の均衡のうちにあると言える。それはたとえば、EU諸国の通貨統合を目指した「マーストリヒト条約」に関する国民投票において、この地方がフランスの他の地域と比べて際立って多い賛成票を投じたという事実のうちにも表れているだろう。

こうしたケルト圏への結びつきを象徴するのが、なによりも音楽である。とりわけワールドミュージック・ブームのなかで、この地域が「ケルト音楽」の一翼を担うようになって以来、その関係はますます強固になっている。夏期にブルターニュの各地で開催される音楽祭は「ケルト祭」の名で呼ばれ、この地方の重要な観光資源でもある。なかでもカンペールの「コルヌアイユ祭」 *Festival de Cornouaille* やロリアンで開催される「インターケルト・フェスティバル」 *Festival interceltique* はその規模の大きさと名高く、とくに後者は毎年ケルト圏のミュージシャンが集結する世界屈指のケルト音楽の祭典として知られている。

19世紀ー民謡収集の始まりと地域主義

ブルターニュの音楽が人々に知られるようになったのは、19世紀のことである。きっかけは、フィニステール県出身の貴族、テオドール・エルサール・ド・ラヴィルマルケ子爵 Théodore-Hersart de la Villemarqué が1839年に出版した『バルザズ・ブレイス(ブルターニュ民謡)』 *Barzaz-Breiz* という歌集だった。この書物はブルターニュで収集された民謡を、ブルトン語の原文にフランス語の対訳を付して出版したものであったが、大作家ジョルジュ・サンドから「ホメロスに匹敵する」と絶賛され、フランスのみならずヨーロッパ各国で大きな評判となった。

ラヴィルマルケによれば、ブルターニュの民謡は大きく三つに分類される。まず神話や伝説や歴史的な出来事に材をとった「グウェルス」 *gwerz*、恋愛歌や子守歌などの生活歌である「ソーン」 *sône*、そして聖人の生涯やキリストの受難などをうたった「宗教的な歌」 *chants religieux* である。なお、このラヴィルマルケの分類はおおむね現在でも通用している。

19世紀のブルターニュでこうした民謡の伝承者となったのは、乞食、屑屋、織工、粉屋、仕立屋、木靴屋などのいわゆる下層民だった。職業柄、ブルターニュ各地を転々とした彼らは、行く先々で歌を仕入れ、それを人々に伝えて歩いた。乞食が施しの返礼に歌をうたうことも少なくなかったという。

この地方にはまた「歌の瓦版」とでも呼ぶべき刷り物もあり、民衆に深く浸透していた。大方が一枚もので、歌詞だけが印刷されていたが、ときに楽譜が印刷されることもあった。内容はさまざまだったが、なかには火事の発生やコレラの流行などをうたったものもあり、メディアが限られていたこの時代には人々にニュースを伝える役割を担っていてもいた。こうした刷り物は、祭りなど人が多く集まる場所で行商人によって売られ、彼らはしばしば自ら歌って見本を示したという。

ところで、ブルターニュにおける民謡の収集は、ラヴィルマルケ以後も衰えを見せなかった。きっかけとなった彼の歌集は、歌の収集が学問的な性格を帯びるにつれ、その真正さに疑問が投げかけられるようになったが、一度確立した「歌の国ブルターニュ」の評判は揺るがなかった。民謡を土地の魂の表現として称揚するロマン主義の風潮も、それを後押しした。

この時代の象徴が、いまなお伝説的な歌手として語られるマルハリット・フリユップ *Marc'harid Fulup* である。1837年にトレゴール地方の寒村に生まれた彼女は、フランス語はもちろん読み書きもまったくできなかったが、人並みはずれた記憶力の持ち主で、同じ民謡や歌を一語も違えずに繰り返して収集家を驚かせた。そのレパートリーは、少なくとも民謡が150、民謡が259あったと伝えられる。両手が不自由であったためまともな仕事はできず、乞食を生業としたという。

19世紀末のブルターニュの地域主義運動は、このマルハリットを郷土の象徴に祀り上げる。彼女は「ブルターニュのフォークロアの女王」としてことあるごとに公の場に担ぎ出され、死後には碑文を刻んだ大理石の墓が贈られた。現在では故郷の村に彫像も建つ。その歌は1900年にフランソワ・ヴァレ *François Vallée* によって蠟管に録音され、いまに残る。

20世紀ーケルト・サークルとフェス・ノスの登場

このマルハリットの死後、ブルターニュは急速な変化に見舞われる。とくにブルトン

語は第一次大戦を境に著しく衰退する。ブルターニュのフランス語化は兩次大戦間を通じてその後も急速に進み、第二次大戦後にはブルトン語の話者は全てフランス語とのバイリンガルになる。19世紀半ばまではバス・ブルターニュ地方の人々の八割はブルトン語のみのモノリンガルだったのだから、この変化は大きい。

20世紀になると、都市住民の間における農民フォークロアのブームに乗じて、伝統的な踊りや民族衣装などを呼び物とする祭りがブルターニュの各地で開催されるようになる。こうした祭りは観光ブームの到来とともにその数を増し、伝統的な歌や踊りの保存を目的とする「ケルト・サークル」と呼ばれるグループが各地に現れる。ビニウ（バグパイプの一種）やボンバルド（オーボエの一種）といったブルターニュの伝統的な木管楽器の演奏も1940年代から編成が大きくなり、「バガド（楽隊）」 *bagad* という名で呼ばれるようになる。1950年、これらの団体は「ケンダルフ（連結）」 *Kendalc'h* というひとつの組織に統合され、その活動はますます盛んになる。5年後にはバガドの数は70、ケルト・サークルの数は90に達していた。

もっとも、民謡の伝承という点で重要なのは、1950年代に始まった「フェス・ノス」 *fest-noz* の復興だろう。ブルトン語で「夜祭り」を意味するこのフェス・ノスは、厳しい農作業が終わった後の農民たちの気晴らしとして、ブルターニュ中央部のポエル地方で行われていた催しだった。「カン・ア・ディスクン（歌と返し歌）」 *kan-ha-diskan* というこの地方独特の民謡に合わせてガボットを踊るこの祭りは、農作業の機械化とともに衰退を余儀なくされたが、それを新しい形で蘇らせたのが歌手のロイス・ロパルス *Loeiz Ropars* だった。彼はそれまで踊りの輪のなかにいた歌手を踊りから切り離して、マイクの前に立たせた。歌手と一緒に踊っているときには、輪の大きさは互いの声が聞こえる範囲を越えなかったが、彼らがマイクの前に立つと、その大きさには際限がなかった。ロパルスはまたフェス・ノスの場所を、それまでの野外からダンスホールや公民館などの室内に移した。この新しい形のフェス・ノスは、地域の交流に最適な娯楽として60年代を通じてブルターニュ中に普及し、70年代にはアラン・スティーヴェル *Alan Stivell* の活躍によって空前のブームを迎えることになる。

スティーヴェル革命

アラン・スティーヴェル、本名アラン・コシュヴルー *Alan Cochevelou* は、1944年、ブルトン人の末裔としてパリに生まれた。父ジョールは音楽や絵画に天賦の才能を発揮する才人であったが、やがてケルト人の末裔としての誇りから、古のバルドが歌の伴奏に使ったハープの復元を志す。十年の歳月をかけて完成したそのハープに真っ先に関心を示したのが、まだ10歳のアランだった。この楽器ですぐにアイルランドやブルターニュの音楽を弾きこなすようになった彼は、その後、ブルターニュの民族色の強いボーイスカート団「ブレイモール（オオカミウオ）」 *Bleimor* に入団し、バガドの一員としてビニウやボンバルドの演奏も始める。

60年代初頭、アメリカのフォーク・ミュージックと出会って衝撃を受けた彼は、それをブルターニュの伝統音楽と結びつけようと試み、ケルティック・ハープを片手にパリのアメリカン・センターのフォーク集會に通いつめる。1967年、ブルトン語で「泉」を意味する「スティーヴェル」をステージネームとしたアランは、フィリップスと契約。70年にブルターニュ色を前面に出したシングルをヒットさせると、最初のアルバム『ルフレ（反映）』 *Reflets* の制作に着手する。ブルターニュの民謡や舞曲を現代風にアレン

ジしたこのアルバムは、発売後わずか数ヶ月で一万枚を超えるセールスを記録した。1971年末、二枚目のアルバム『ケルティック・ハーブ・ルネサンス』 *Renaissance de la harpe celtique* を発表した彼は、翌年二月にはオランピア劇場に出演。公演の様態を収めたライブ盤『オランピアのアラン・スティーヴェル』 *Alan Stivell à l'Olympia* は、一年で15万枚を売り上げる大ヒットとなった。

いまなお「スティーヴェルの年」として語り継がれる、この70年代前半のスティーヴェルの活躍がブルターニュの人々にもたらした影響は大きかった。実際、誰もが時代遅れだと思っていたブルターニュ民謡が大衆の支持を集め、絶滅寸前のブルトン語がラジオやカフェのジュークボックスから鳴り響いたのだから、その効果は計り知れなかった。とくに若者に与えた影響は大きく、彼らが祖先の文化に目を向け、ブルトン人としての誇りを抱くきっかけになった。しばしば「スティーヴェル革命」と呼ばれる由縁である。

「ダステュム」の設立

スティーヴェル以後、ブルターニュの伝統音楽にインスピレーションを汲もうとする音楽グループは跡を絶たなかった。しかし、ひとつ問題があった。それはこの音楽のレパートリーの乏しさだった。

最初にこの問題を自覚したのは、パリ周辺に住むブルトン人の若者たちだった。1972年、彼らは自ら「ブルターニュのナショナル・テープライブラリー」を創設すべく、ブルトン語で「収集」を意味する「ダステュム」 *Dastum* という名前の組織を立ち上げる。最初は小規模であった組織も、政府の援助などによって徐々に活動を拡大し、1978年には雑誌『ミュージック・ブルトンヌ』 *Musique bretonne* を創刊、81年にはルーデアックに最初のメディアテックをオープンさせる。80年代半ばに本拠地をレンヌに移すと、書籍の出版やレコード・CDの販売にも乗り出して活動を多様化。90年からは支部の拡充に努め、現在はカレー、ラニオン、ナント、ポンティヴィー、レヌヴァン、カンペールとブルターニュ全県に支部をもつ。

「ダステュム」の活動の中心は、ブルターニュの口頭伝承の収集・保存・普及にある。これは設立から30年以上を経たいまでも変わらない。収集の対象となるのは、民話、諺、囃子歌、器楽音楽、ブルトン語・フランス語・ガロ語による歌など、あらゆる種類の口頭伝承である。収集には自身のコレクションを寄贈することを厭わない多くのボランティアの協力がある。音資料は専門職員によって分析され、誰もが容易に利用できるように分類・整理される。資料の利用はすべて無料であるが、幸い著作権に関するトラブルは設立以来一件もないという。レンヌのサンテ通りにある「ダステュム」の本部を訪れる人の数は年間600から700人。創設以来集められた歌や民話の数は30,000、ラジオ放送なども含めた音資料の数は60,000にも上り、録音の総時間は6,000時間に達するという。むろん、その量は年々増え続けるばかりである。1998年からは資料のデジタル化に着手、翌99年にはインターネット・サイトも創設した。将来的にはこのサイトからすべての資料にアクセスできるようにするのが目標だが、テープだけで3,000から3,500時間はあるアナログ資料のデジタル化は、テキストの分析やインデックスの作成と平行して進められるため多大な時間がかかるという。現在「ダステュム」の予算はその40%を自身の出版事業の収入に、残りを文化省、地方、県および支部のある町からの助成に拠っている。予算額は年により異なるが、2002年の予算は550,000ユーロ（約75,350,000円）であったという。

II ブルターニュの歌手たち

ブルターニュにおける文化的リバイバルによってクローズアップされたのが、ブルターニュの民謡歌手たちであった。それまで狭い範囲に限られていた彼らの活躍の場は、これを機に大きく広がった。一方、音楽市場におけるブルターニュ民謡の需要の増大とは裏腹に、歌そのものは人々の生活から急速に消えていった。かつては誰もがうたうものであった民謡は、次第に歌の上手な人だけのものになり、歌い手と聴き手の分化が進んだ。いまや民謡の伝承者はプロの歌手であり、民謡のワークショップも彼らが中心である。ここでは、そうしたブルターニュの民謡歌手たちの幾人かのプロフィールを紹介し、ブルターニュの音楽文化の一端に触れてみたい。

まず、**ゴアデック姉妹 les soeurs Goadec**。マリヴォンヌ Maryvonne、ユーージェニー Eugénie、アナスタジー Anastasie の三姉妹からなるこのグループは、ステイーヴェル以後、ブルターニュ民謡の顔として広く知られた。全員がブルターニュ中部トレフィンの出身で、最年長のマリヴォンヌは1900年の生まれである。十人兄弟で、幼少時から親兄弟とうたうことが多かったという。親戚には父方・母方を問わず、有名な歌い手を幾人も数えたい。彼女らを一躍人気者にしたのは、1956年から始まるフェス・ノスの復興で、ステイーヴェルの成功ののちはパリにも登場し、1973年にはボビノーでリサイタルを開いた。1983年、マリヴォンヌの死とともに活動を停止。2003年のユーージェニーの死去で、メンバー全員が故人となってしまった。

その彼らとフェス・ノスで人気を二分したのが、**モルヴァン兄弟 les frères Morvan** である。ゴアデック姉妹の男性版というべき存在で、フランソワ François、アンリ Henri、イヴォン Yvon の三兄弟よりなる。ブルターニュ中部の小村ボコルの出身。幼少期の家族の会話はブルトン語のみで、フランス語は学校で初めて教わったという。歌のレパトリーの大半は母親から引き継いだ。彼女はそれを夫から学んだらしい。19世紀半ばに生まれたこの夫は、読み書きができたため、乞われて歌の刷り物をうたうことが多く、歌をたくさん知っていたという。兄弟は母親が日常的にうたう歌をもっぱら耳で記憶した。カン・ア・ディスカンを得意とし、ジャガイモの収穫など大きな農作業の後に行われる「ノズヴェシュー（夜の集い）」nozvezhiou でよくうたっていたが、農業の機械化につれて祭りは衰退、活動の場をフェス・ノスに移す。以来、農作業のかたわらに出演したフェス・ノスは数百に及ぶが、ブルターニュ以外の土地に出かけることは稀だという。最近では若い世代にカン・ア・ディスカンを伝えるための教育活動にも力を入れている。

彼らに続く世代の代表が、**ヤン・ファンシュ・ケメネール Yann-Fañch Kemener** だろう。まだ40代後半だが、歌手歴はすでに30年を超える。ブルターニュで最初のプロの民謡歌手であり、これまで20枚ほどのCDを出し、毎年100回近いコンサートをこなす。芸術家に対する公的援助が盛んなフランスでは、彼のような民謡歌手が少なからずいる。ブルターニュ中部プリン地方の小村サン・トレフィヌの出身で、子供の頃、村人の大半はフランス語を知らず、会話はすべてブルトン語で行われたという。カン・ア・ディスカンの本場であるこの地方では、道で出会った人がいきなり歌で会話を始めることもあったらしい。小さいながら歌のコンクールもあったという。そんななかで、ケメネールは13歳のときからステージに立つ。やがてアラン・ステイーヴェルの活躍の影響で、

「カン・アル・ボブル（民衆の歌）」 Kan ar Bobl という民謡コンクールが始まり、ケメネールは18歳でその第4回大会の優勝者となる。以来、ブルターニュ民謡の第一人者として活躍する彼は、伝統歌謡をベースに、「バルザス」 Barzaz というバンドを組んだり、ジャズピアニストのディディエ・スキバン Didier Squiban と共演したりと、さまざまな試みを行っている。2000年からはチェリストのアルド・リポシュ Aldo Ripoché と組み、2005年には最新アルバム『アン・ドルン（手）』 An Dorn も発表した。彼はまた民謡の収集家としても知られ、1996年に長年にわたる成果をまとめて、『ヤン・ファンシュ・ケメネールの旅日記』 *Carnets de route de Yann-Fañch Kemener* として出版した。

ケメネールと同世代で同時期にプロの歌手になったのが、エリック・マルシャン Erik Marchand である。パリの生まれだが、一族はブルターニュのガロ地方の出身で、父親の所有するフェス・ノスの録音によってブルターニュの音楽に目覚めたという。18歳のときにパリのフェス・ノスでマヌエル・ケルジャン Manuel Kerjean の歌を聴いて魅了され、以後、定期的にブルターニュに通って彼の教えを受ける。75年にパリからブルターニュへ移住。音楽活動のかたわらダステュムに勤務し、そこに保存された膨大な録音を聴きながらレパートリーを拡げたという。「トルジェンヌ・ゴール」 Treujenn Gaol というブルターニュのクラリネットの名手でもあり、この方面でも活躍も多い。歌手としてはブルトン語はもちろん、ガロ語でもうたう。世界の民族音楽に造詣が深く、とりわけルーマニアの音楽の紹介には熱心で、その関心を自らの音楽にも積極的に反映させている異色の歌手である。

このマルシャンやケメネールが称賛して止まないのが、マダム・ベルトラン Madame Bertrand である。彼女はまったくの素人で、ステージや録音で活躍したわけではないが、伝説的な歌手として知られた。父親が歌手として名高く、レパートリーの多くをこの父親から受け継いだという。9歳のときに母親と死別し、16歳で木靴職人と結婚。木靴職人は材料を求めて作業場を転々とするのが常であり、彼女の人生も大半はそうした作業場の掘立て小屋で過ごされた。大きな作業場には職人も多く集まり、歌を覚えるには格好の場所だったという。歌の上手さは周囲では有名だったが、フェス・ノスへの参加に消極的だったせいもあり、最初の録音は1961年、75歳のときだった。ダステュムに残された録音は数こそ少ないが、70年代以降の歌手に与えた影響は大きく、とくに「スכולヴァン」 Skolvan は比類のない名唱として知られる。

最後に比較的新しい世代の歌手を二人紹介しよう。まず、アニー・エブレル Annie Ebrel。ケメネールともよく共演するが、世代的には一回り下である。コート・ダルモール県のブルトン語圏の村に生まれた彼女は、幼少期からブルトン語を話し、歌に親しんだという。13歳のときに初めてステージに立ち、1984年の「カン・アル・ボブル」に出場して注目を集める。カン・ア・ディスカンなどの伝統歌謡の歌手として知られたが、90年代に入ると「ディベン（末端）」 Dibenn というグループでも活躍し、伝統をベースにした新しい歌もうたう。その後、イタリア人のジャズベーシスト、リッカルド・デル・フラ Riccardo Del Fra と出会い、98年にはアルバム『ヴルス・ロアール（月のビロード）』 *Voulouz loar* を発表。批評家から絶賛された。最近では自ら作曲も手がける。

いまひとり、デネス・プリジャン Denez Prigent である。彼は60年代末、フィニステール県北部サンテックの生まれ。父親が歌手であった祖母の影響で、幼時からブルトン語を話し、民謡をうたっていたという。カン・ア・ディスカンの歌手として多くのフェス・ノスに出演、1987年には「カン・アル・ボブル」の優勝者となる。ブルトン

語の教師やラジオのブルトン語番組の司会などをしながら音楽活動を続け、92年にはレンヌで開催されたロックやテクノを中心とする音楽祭「トランスミュージカル」Transmusicales に出演して、大きな評判となる。伝統楽器とジャングルを合体させた斬新なアレンジで知られ、ブルターニュの音楽祭では引っ張りだこの人気者である。

ここでブルターニュ音楽に関する具体的な数字を少し挙げておこう。1999年のデータであるが、この年3月にパリのベルシーで行われたブルターニュ音楽のコンサートに訪れた観衆は15,000人、アラン・スーヴェストルの新譜の売り上げが70,000枚、ダン・アル・ブラスの『ケルトの遺産』の売り上げが700,000枚、マノーの『パニック・セルティック』の売り上げが130万枚であった。ワールドミュージックのカテゴリーに分類されるCDは、フランスで売られている全CDの24%、20,225点に上るが、そのうちフランスで制作されたものは点数の多さで3番目に位置し1,200点に上るが、その46%、すなわち550枚はブルターニュ音楽である。この年、ブルターニュで行われたフェス・ノスの数は、おそらく数千は下らない。夏期にブルターニュで行われた45のフェスティヴァルのうち、音楽祭は20。ロリアンのインターケルト・フェスティヴァルの訪問者は400,000人であったという。もちろん、こうした数字は直接民謡の受容に関わるものではないが、ブルターニュ民謡を取り巻く状況の一部として留意するに価するだろう。

おわりに

ブルターニュであれ奄美であれ、時代とともに社会構造が変化し、生活のなかで民謡が伝えられる状況が減少すれば、その伝承は難しくなる。なかでも最大の壁はことばだろう。シマグチもブルトン語も、ともにその継承が深刻に危惧される少数言語であり、民謡の伝承の困難さはことばの継承の難しさと分かち難く結びついている。もちろん若い有望な歌手はどちらにもいるし、社会における民謡の認知度という点でもたぶん昔に比べて格段に上がっている。しかし、歌の実質をなすことばを日常的に話す環境がなくなれば、失われるものはむしろ即興性に限らない。幸いブルターニュにはブルトン語を流暢に話す歌手がまだ多くいるし、言語復興運動も盛んである。他方、奄美では4,50代の唄者でもシマグチが話せないのが普通である。その点では、あるいはブルターニュの方がまだ状況は明るいかもしれない。もっとも、ブルターニュにおいても聴き手の多くがすでにブルトン語を解さないという点では、奄美と変わらない。この点では、どちらにも危惧すべき点は多くある。

それに比べれば、しばしば賛否の分かれる民謡の現代風のアレンジなど、むしろ伝統が若い世代に継承されるときに自然な現象と言えるだろう。そもそも誰も知らない歌のアレンジなど無意味であることを思えば、これも民謡が人口に膾炙した証拠と受け取るべきなのかもしれない。が、それも一方で伝統的な民謡が存続しているという条件で、であることは言うまでもない。この均衡が保たれている限り、問われるべきはアレンジの可否ではなく、むしろその質であろう。

いずれにせよ、民謡がいかんして伝えられるかと問うとき、問題となるのは音楽のみに止まらない。民謡の存続を可能にするのが、社会の有り様であり、世界の有り様であることを思えば、それはことばの問題をはじめ他の多くの問いと関わらざるを得ない。

ブルターニュにせよ奄美にせよ、民謡の伝承が問題になるとき、そこで本当に問われているのは、私たちがどのような世界を望むかという、そのことなのかもしれない。

参考文献

- Association Buhez, *Parlons du breton!*, Editions Ouest-France, 2001.
- «Alan Stivell—Quarante ans de musique bretonne contemporaine», *ArMen* N° 87, 32-39, août 1997.
- «Annie Ebrel», *Musique Bretonne* N° 183, 20-23, mars-avril 2004.
- BREKILIEN Yann, *Slan Stivell ou Folk-celtique*, “Nature et Bretagne”, 1973.
- Dastum N^h 5—sonskridaoueg vroadel Breizh, Coopérative BREIZH, 1978.
- «Denez Prigent», *Musique Bretonne* N° 182, 8-11, janvier-février 2004.
- GOURVIL Francis, *Théodore-Claude-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960.
- GUÉNÉGOU Yann, «Dastum : la mémoire du futur», *Armor*, 34-35, octobre 2002.
- KEMENER Yann-Fañch, *Carnets de route de Yann-Fañch Kemener*, Skol Vreizh, 1996.
- LAURENT Donatien, Fañch Paotic, Pierre Prat, *Les passeurs de mémoire*, Association du Manoir de Kernault, 1996.
- LE COADIC Ronan, *Bretagne, le fruit défendu?*, Presses Universitaires de Rennes, 2002.
- LE CORRE Guy et Erwan Chartier, «Les frères Morvan», *ArMen* N° 111, 24-31, avril 2000.
- MORVAN Françoise, *François-Marie Luzel*, Terre de Brume-Presses Universitaires de Rennes, 1999.
- Musique bretonne*, Le Casse-Marée/ ArMen, 1996.
- PICHARD Jean-Pierre et Philip Plisson, *Musiques des mondes celtes*, Editions du Chêne, 2000.
- ROCHARD Yvon, «Dastum—Trente ans au service du patrimoine oral», *ArMen* N° 130, 2-9, september/ octobre 2002.
- 原聖, 『周縁的文化の変貌』, 三元社, 1990.
- 梁川英俊, 「マルハリップ・フリユップのこと—ブルターニュの口承文化を伝えた女乞食」, 『神話・象徴・文学』, 楽浪書院, 209-224, 2001.
- 梁川英俊, 「ヤン・ファンシュ・ケメネールさんのこと—ブルターニュの民謡歌手はかく生きる」, 『神話・象徴・文学Ⅲ』, 楽浪書院, 449-463, 2003.